

シンテッポウユリ栽培（秋冬出し）における定植前冷蔵による抽台率の向上

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

シンテッポウユリの抽台には一定の低温に遭遇することが必要とされているが、本県の秋冬出荷作型は高温期の栽培となるため、抽台率の低さが課題となっている。そこで、夜冷育苗や定植前の苗冷蔵による抽台率向上技術を検討したので紹介する。

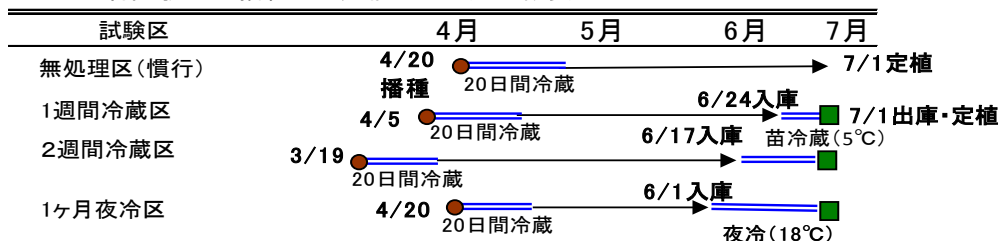
(2) 情報・成果の要約

- 1) 定植前1か月間の18℃以下の遭遇時間が400時間以上の場合に、抽台率向上効果がみられる。
- 2) 苗冷蔵（5℃、暗黒）定植前2週間処理の場合、無処理より抽台率が約20%向上する。
- 3) 夜冷育苗（夜温18℃以下）定植前1か月処理の場合、無処理より抽台率が約20%向上する。

2 試験成果の概要

- (1) 品種は‘F₁オーガスタ’を供試し、2011年7月1日に定植した。定植日を揃えるため図1のとおり播種を早め、定植前1週間、2週間の苗冷蔵（5℃、暗黒）を行った。また、定植前1か月間の夜冷育苗（17時～8時、18℃）も行い、1か月夜冷区とした。

図1 各試験区の播種から定植までの処理概要



- (2) 6月1か月間の18℃以下の積算遭遇時間は、1週間冷蔵で262時間、2週間冷蔵432時間、1か月夜冷で461時間であった（表1）。
- (3) 抽台率はいずれの処理区も無処理区69%より高く、2週間冷蔵区で87%、1か月夜冷区で88%であった（図2）。
- (4) 採花率の推移も抽台率と同様であり、いずれの処理区も無処理区より採花が早く、採花率は高かった（データ省略）。
- (5) 定植前の苗冷蔵試験については、2010～2012年の3年間継続して調査した。低温遭遇時間を比較すると、2週間冷蔵区はいずれの年も18℃以下の遭遇時間が400時間以上であった（表2）。
- (6) 無処理区の3年間の抽台率推移を見ると、2010年、2012年は定植後が高温で推移したため（データ省略）、2011年に比べて抽台が大幅に遅れた。一方で、2週間冷蔵区ではわずかな差が見られるものの3年間とも抽台率はほぼ同様に推移した。また、抽台率はいずれの年も2週間冷蔵区が無処理区より10～20%高かった（図2）。

表1 2011年の定植前1か月間における各試験区の積算低温遭遇時間

試験区	～16℃	～18℃	～20℃
無処理	27	99	155
1週間冷蔵	190	262	351
2週間冷蔵	360	432	503
1か月夜冷	8	461	470

注)6/1～7/1の累積時間を示す

定植:2011年7月1日

冷蔵(5℃):1週間冷蔵;6/24～7/1

2週間冷蔵;6/17～7/1

夜冷(18℃):6/1～7/1

表2 2010～2012年の定植前1か月間における各試験区の積算低温遭遇時間

試験年度	試験区	～16℃	～18℃	～20℃
2012	無処理	17	85	231
	2週間冷蔵	347	403	447
2011	無処理	27	99	155
	2週間冷蔵	360	432	503
2010	無処理	70	121	161
	2週間冷蔵	429	490	511

注)定植前約1か月間の累積時間を示す

定植;2010、2011年は7月1日、2012は7月2日

2週間冷蔵;定植前2週間苗冷蔵(5℃)

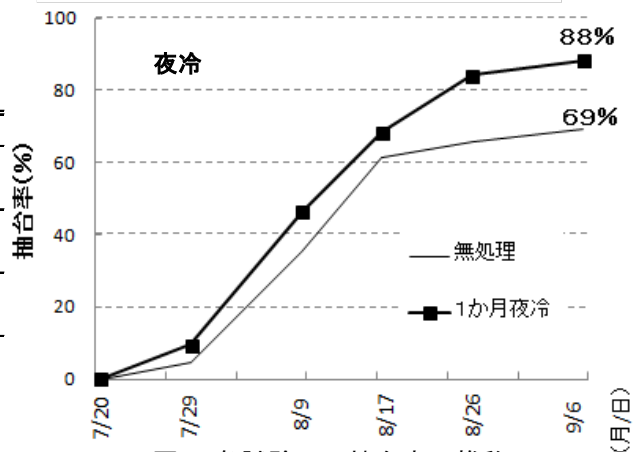
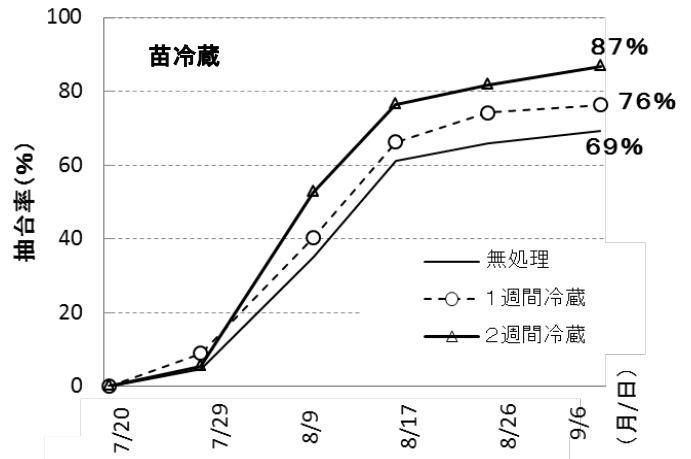


図2 各試験区の抽台率の推移

注)定植:2011年7月1日

上:苗冷蔵、下:夜冷育苗

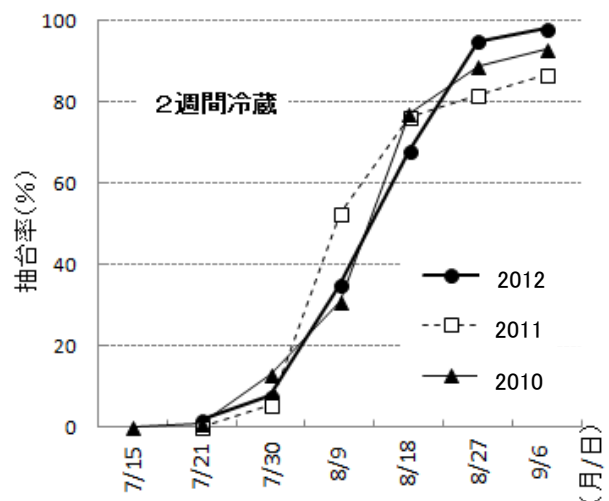
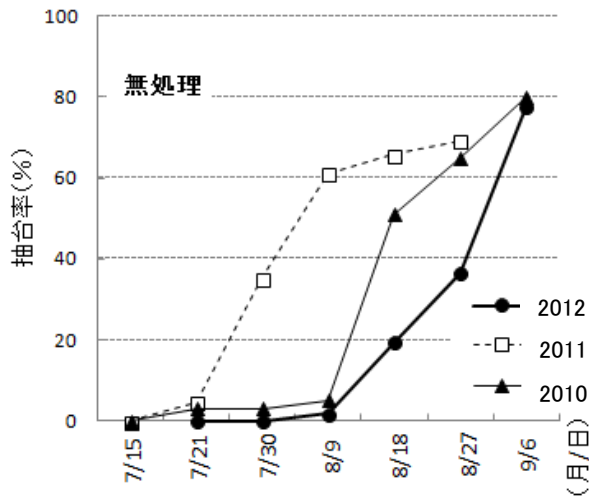


図3 2010～2012年の各区の抽台率比較

注)左:無処理、右:定植前苗冷蔵(2週間)

3 利用上の留意点

- (1) 本技術により抽台が無処理より早くなるため、無処理に比べて輪数が減少する傾向がみられる。また、抽台本数は増加するが、ブラスチングもわずかに増加する傾向がみられた。これらについては対策を検討中である。

4 試験担当者

花き研究室 研究員 前田香那子
 研究員 米澤 朗
 室長 岸本 真幸